Forma-Foro 12

フォルマ・フォロ｜武蔵野美術大学建築学科・日月会
MAR.1.2012｜VOL.12

INTERVIEW

建築・コミュニティ、そして物語へ

大島 芳彦
ブルースタジオ［26期］

学生時代の経験で、いまの仕事につながっていると実感する思い出はありますか？

在学中に、建築学科の友人と立川の米軍ハウスで共同生活をしていました。東京生まれの東京育ちで実家暮らしだった僕は、とにかく一人暮らしに憧れていました。先輩に誘われたのがきっかけで、立川の米軍ハウスに住み始めました。実際住んでみると、そこはボロ家。3人部屋で家賃5万円と安いが、窓は木製のサッシですきま風は入るし、ドアはベニヤ板で薄っぺらい。少しずつ直しながら暮らしていました。住戸は全部で4棟あり、それぞれにムサビの他学科の学生が住んでいました。そのときの仲間の一人が、いまのブルースタジオの代表取締役の大地山です。

けれど、3人男同士の共同生活はうまくいかないもの。僕は1年生になると軍ハウスを出てしまいました。その後、1年分寄せ集めて再びボロアパートを探しました。家賃は安いし、何か工夫したいと思ったは大家は聞き入れてくれ、なぜか自分が家づくりにコミットできることが楽しかった。風呂もないだけど、近くの同じ友達の家で借りていました。そうやって学生時代に3回ほど住まいを変えました。

多くの賃貸物件のリノベーションを手がけていますが、最近は「コミュニティ」を重視した事例が多いですね。

以前からコミュニティの重要性には注目していました。そのきっかけとなったのが、ラ・ヴィータ東山荘。東山にある築38年のオフィスビルを一棟丸ごとリノベーションした仕事でした。ここでは古さを活かし、クリエーターの入居者さんと一緒にリノベーションを行いました。

リノベーションはいかにお金をかけずに魅備するかが、賃貸を成立させる第一条件。たとえ建物を新築のように作っても、そこに一貫性や物語性を見出せないのが一般的な消費者のメンタリティだと思います。僕らに必要なのは、モノを与えるのではなく物語性を与えること。

多摩平団地の再生プロジェクトは、「環境・住」をコンセプトに設計しました。住まいの周囲にランドスケープをつくるのではなく、すでに存在している豊かな環境の中で住まい方を考える。はじめに物語を与えると、あとは自分たちでどう参加しようかと住む人が独自に考えることができます。

これからの建築はどうあるべきですか。

住まいを考えたとき、人がそこに住む理由は必ずあります。なぜ賃貸？なぜ予算は2千万円？なぜローンは30年？…と、いろんな要素が絡まって、その複合体がなぜその人がそこに住んでいるのかの答えになります。それらの要素がすべて良いバランスであることで人はストレスなく暮らせる。どんなにすばらしい就望の家に住んでいても、大きな借金を抱えながら暮らしていたら幸せじゃない。

僕らは設計事務所でありながら、不動産業をやっています。生活をデザインしようと思ったら、そこまで拡張せざるを得なかったから。不動産の売買のスタッフは、買い手側の生活のコンサルタントをしています。どういう生活がしたいですか？この場所でこのくらいの築年数だと金額はいくらですよ、と。建築の設計やディテール、家具から不動産まで編集し直すことをサービスとして提供することが必要だと思います。

最後に、学生へのメッセージをお願いします。

建築は、社会の中ではさまざまな役割を果たしています。自分と社会との関係性を意識して、いろんなことに興味持ってほしいです。

ありがとうございました。

大島 芳彦　Oshima Yoshihiko
ブルースタジオ代表取締役
1970年東京生まれ。1993年武蔵野美術大学建築学科卒業。ギリシャ、アメリカなどを経て、石本建築事務所入社。2001年ブルースタジオ等務取締役、クリエイティブディレクター就任。建築のリノベーションと不動産のコンサルタントを組合させた活動を行う。
http://www.bluestudio.jp

「多摩平の森団地」団地再生プロジェクト
独立行政法人都市再生機構（UR都市機構）が手がけるルネッサンス計画2「住棟ルネッサンス事業」の一環で、1960年竣工の公団住宅「多摩平の森団地」の住棟とその周辺敷地の団地再生・運営事業。ブルースタジオは、3つの住棟のリノベーションを手がけ、団地独自の古さを活かして多様なコミュニティが集える共有空間を充実させた。（第6回武蔵野美術大学建築学科界隈倍賞）

写真提供＝ブルースタジオ

TOPICS

背景を想像するプロダクトデザイン

田中 行
イッスン代表［24期］

田中 行　Tanaka Yuki
建築・インテリアデザイナー
1991年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、スタジオ80にて5年間内田繁氏に師事。2001年建築+デザイン事務所イッスン設立。一級建築士、インテリアを中心とした建築から家具、プロダクトデザインまで手がける。
http://www.yukitanaka.biz

← YU・WA・I（ゆ・わ・い）：株式会社有高銀山堂
四国の伊予水引をあわじ結びで結び上げたボトルサック。「ゆわい」とは結い祝う意味。

↓ SOLARIS：Kai House / ランバス株式会社
9つの輪を抽でまわし球体にするディスプレイ用のバスケット。秋田伝統工芸の曲げわっぱで出来た製品。

写真提供＝イッスン

縁あって、地方の伝統工芸や技術を使ったプロダクトをデザインしている。そこで目指すのは、手にした時に空間をイメージ出来るプロダクトをつくることである。建築家やインテリアデザイナーがプロダクトデザインをするならば、それをどのように置くだろうか、どんなものと組み合わせるだろうか、使い手のライフスタイルや背景を想像し、単体のデザインに陥らず、モノの出す空気感や演出性をデザインすることが重要だ。その視点からして、建築出身であるデザイナーが、日頃原寸でデザインを手掛けるプロダクトデザイナーや伝統的意匠を継承する職人との違いを出すことはできない。それはクライアントからも強く求められる。

伝統工芸、技術はシンプルな仕組み（設備のかからない、手作業を含む）ゆえ、伝統として継承されている。しかし、従来のままでは、現代の空間にマッチするモノではない場合がある。高度な手作業の技術を「今の時代」に浮上させるため、空間感を意識したデザインを提案することは、作り手もリアリティが持て、新しいデザインに取り組みやすくなる。

空間軸と時間軸をプロダクトデザインに取り入れることで、伝統が進化し、現代から未来へさらに引き継がれることになるだろう。

INFORMATION

2011年 イベント報告

小倉 康正　Ogura Yasumasa
日月会事務局［18期］

4月23日｜フォルマ・フォロ セミナー第4回
保坂陽一郎『西から東へ　―建築家の旅』
対談：永松賢一
保坂氏が巡ってきた世界のヴァナキュラー建築。それらを西から東（ヨーロッパ・北アフリカから日本）へと至る道筋に沿ってみてみると―。浮かんできたのは、地域を超えて連携されるもの、あるいは連鎖するもの。そして、現代が手放した群とその建築の魅力。興味深いテーマは尽きるかった。

9月10日｜フォルマ・フォロ セミナー第5回
中村好文『3.11以降の住宅建築家の仕事』
対談：筱久美子
スライドにときおり顔を出す魅惑的な料理。それらは施主や中村氏自身が調理したもの。ライフスタイルも含めた中村氏の設計姿勢、施主との関係がそこに象徴されていた。住宅という器の豊かさを実感。

7月16日｜第13回日月会賞の審査と表彰＊
太陽賞：高橋義明「屋根のある谷」
満月賞：小田隆史「Roji House」
三日月賞：小名智子「木、ミル。」
新月賞：野田樹里「地形に住まう」
審査員長／藤井善［30期］増田信吾［40期］
審査員／山本幸正［7期］笹口敦［20期］林英理子［28期］
北川貴好［32期］櫻橋宏［41期］　＊対象は3年生の前期課題

10月29日｜日月会シンポジウム第2回
『2014-2015　建築学科創設50周年に向けて』
パネラー：伊坂道子［9期］木岡敬雄［15期］七田紹匡［21期］
田邊寛子［31期］司会：小倉康正［18期］
歴史系、まちづくり系、暮らし系？と多彩な顔ぶれであったが、印象的だったのは、パネラーの皆さんが、ともに過去と次の世代への橋渡しを自認されていたこと。実はこれこそがクリエイティブな仕事なのかもしれないと感じた。

↑太陽賞を受賞した、高橋義明（菊地スタジオ）さんの「屋根のある谷」
↓フォルマ・フォロセミナーの講師
保坂陽一郎氏（左）、中村好文氏（右）

ご挨拶

更田 邦彦　Fukeda Kunihiko
日月会会長［16期］

本年も「フォルマ・フォロ」を会員の皆様にお届けすることができましたことをうれしく思います。今号からデザイン・構成をリニューアルいたしました。これまで同様ご愛読いただければ幸いです。

さて、昨年を振り返れば、年度末の定期総会の準備を進めるなか3月11日に東日本大震災が発生し、次々に更新される、報道に釘付けにされていたことが思い出されます。3月26日に無事開催された総会では、例年の活動計画に加えて「日月会として何ができるのか…」を話し合い、そこであげられたさまざまな意見をプレ・フォロや執行部会でも協議いたしました。その結果、日月会でも支援の一つの方向性を見いだしていくための場を設けようと、「311サポート・フォロ」というフォーラムを開設することになりました。

そもそもを本年度の活動目標の一つとして、会員相互の活動をより広げていくために新たな「フォロ」の開設支援を掲げていたのですが、この「311サポート・フォロ」が最初の立ち上げとなりました。その後、会の内外を問わずいろいろな方のご参加のもと、現地の情報をお聞かせいただきながら、現在、模索・活動を続けています。日月会は、強いて言うならば、復興に寄与することのできるプロの一団であるとも言えます。そんな社会的な位置付けをご一考いただき、「311サポート・フォロ」へもご参加いただけますと幸いです。

さらに、震災関係の活動としては、昨年の4月から7月にかけて「311学生サポート基金」と称し、学生ボランティアへの支援募金活動も行いました。お陽さまで総額115,574円が集まり、8月に実施した本学科学生＋卒業生の被災地におけるボランティア活動にお役立ていただきました。改めまして、皆様の温かいご支援に御礼申し上げます。

本年度は震災によって大きく揺さぶられた1年でした。来年度は少し落ち着いて、被災地のためにさまざまな活動を徐々に形にしていきたいと考えています。

表紙写真
多摩平団地で行われた住民主催のイベント。ブルースタジオは、団地再生とともに、多様なコミュニティの再編に貢献。現代の「フォロ（広場）」は人と人のつながりから生まれる。（写真提供＝ブルースタジオ）

編集後記
今号から誌面を全面リニューアルしました。世の中の状況が大きく様変わりする今。「フォルマ・フォロ」はどんな時でも、社会にまなざしを向け続け、新たに生まれる「建築」の姿を追っていきたいと思います。［onai］

編集：尾内 志帆、坂本 和子
デザイン：松井 雄一郎＋長尾 周平
印刷：株式会社山田写真製版所
発行：武蔵野美術大学建築学科
同窓会・日月会
http://www.nichigetsukai.com
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内

2011年 風景について 考えたこと

2011年は、一生忘れることのない出来事にあふれた。
当たり前だった日常や、生き方そのものを見直した人も多いだろう。
世界で活躍する建築学科の卒業生や学生は、どう感じどう生きたのか。
「2011年、風景について考えたことは何ですか？」
一年を振り返り、想いを寄せてもらった。

釜石第一漁港（2011年11月18日撮影）

鈴木 明
Suzuki Akira

神戸芸術工科大学教授
10期
東京 / 神戸在住

被災地にいなくとも日本のどこにいても、日常風景の見え方が大きく変わってしまった。
海岸まで山が迫る自然の地形に沿って築かれた多くの美しい集落やまちが大津波に飲まれた事実。
関東大震災後の復興計画（私は浅草の復興小学校に通った）、
神戸1995経験も大都市の論理ゆえ、適用できない。原子力発電は核爆弾とおなじ。
われわれの手にはとても負いきれない暴走技術だという事実。
ミネラルウォーターを狭い家に積み上げて生活しながら、
政治・経済・社会すべてがすでにこの技術に絡みとられていて脱原発を宣言できない。
技術者は電気自動車や太陽電池あるいは風力発電をそれに変えようとする。
結局、発電/電力本位制から逸脱した発想をできない、もどかしさ。
哲学が必要なときだと思う。
人間や身体、生活について。
建築やデザインは最先端を目指す必要はないから。
http://www.telescoweb.com

キスミレが咲く広大な阿蘇外輪山の半自然草原

麻生 嘉
Asou Yoshimi

生態系管理・
コンサルタント/フリー
16期
山形在住

末黒の大地に、キスミレやハルリンドウが輝く星のように咲いている。
1970年頃の、阿蘇から九重へと途切れることのない壮大な草原。
野焼きや放牧など、人との長い年月の関わり合いで成立した「半自然草原」である。
まもなく、花野の草原は一斉に表土を剥がされ、栄養価の高い外来種の牧草地へ転換された。
人工津波ともいえる草地改良は、相互関係と偶然の産物である再生不可能な歴史、
つまり、多様で固有の小さきものを、人知れず大規模に破壊した。
その重い記憶から40年後の今、東北地方で半自然草原の復元に取り組んでいる。
その最中に放射能が降り注いだ。
大きなものがもたらす聞然たる風景から小さきものは自立できるだろうか。
http://www.jpgreen.or.jp/greenage/backno/201008.html

建築学科の有志で行った東北ボランティア。ムサビ生30名ほどが参加した

前田智代
Maeda Tomoyo

建築学科
M1
東京在住

自然災害と常に隣り合わせにある日本において、
2011年は自然との関わり方をより強く意識した年になった。
大学院入学の直前に震災が起こり、変わってしまった風景と、
変わらない風景の中で過ごす日常は、考え方をあらためて考え直す毎日だった。
当たり前だったことにも疑問を投じ、何のためにデザインをするのか、
何を目指してどういう未来を描いていくのかという自分の意志を明確にしていく必要を感じた。
物事の根源的な考え方や自分達の意志を色やかたちや空間に変換するという
デザインという行為の可能性を信じて今の、
10年後の、100年後の、1000年後の未来を考えていこうと思う。
http://www.arc.musabi.ac.jp/studio/hasegawa

正井裕子
Masai Hiroko

神戸市中学校教員（美術）
37期
兵庫在住

2011年は私にとって、東日本大震災があった年だ。
何を見ても、目の前にレイヤーを重ねるように、被災地のことが重なった。
また、同居していた祖父が5月にくくなった後も、
家のそこかしこに生前の祖父の姿が見えるようだった。
被災した人も同じように、かつての街や、家族の姿を見ることがあると思う。
全て流されてしまったような街でも、どこかに、前の様子を思い出させるものが残っているだろう。
私の住む神戸は、震災後、実態に合わない再開発で、現在も人が戻ってこない地域がある。
東北の街がどんな復興をとげるにしても、
そこに居た人々の記憶の中の風景が残るようだったらいいと思う。
http://www.geocities.jp/hmhp_art

田熊里子
Taguma Satoko

ARKTIS furniture
36期
ヘルシンキ在住

昨年の冬、首都ヘルシンキから400キロほど北東にあるクオピオという街を訪れた。
気温はマイナス15度ほど。
そんな寒さの中でも地元の人たちは凍った湖の上で散歩したり、クロスカントリースキーをしたり、
そりで遊んだりと、思い思いに冬の醍醐味を楽しんでいた。
しかし、今年は暖冬で雪も少なく、昨年との気温差は10度以上もあり、
温暖化の影響を感じられずにはいられない。
自然と寄り添うような生活がフィンランドのライフスタイルの特徴だが、
それ故に気候の変化が人々のアクティビティーや精神面に与える影響も大きく、
それを目の当たりにすると人間も自然の一部なのだと再確認させられる。
http://www.arktis.fi

↑走ったストランドビーストは2匹
↓テオ・ヤンセンとのワークショップ時の集合写真。
中央の傘に入る白シャツがテオ氏。右が松岡氏

松岡勇樹
Matsuoka Yuuki

アキ工作社
20期
大分在住

国東（くにさき）は大分県の北部に位置する半島で、
古くから「六郷満山」と呼ばれる神仏習合の仏教文化を形成した土地である。
10年前僕は故郷国東に帰り過疎化のため廃校になった小学校を仕事場にしている。
2011年の夏、縁あってこの小学校にオランダの作家テオ・ヤンセン氏がやってきた。
噂はロコミで広がりこの日集まった人は600人に及んだ。
運動場を走るストランドビースト、一緒に駆け抜ける子供たち、地域住民と語り合うアーティスト、
これが僕が見たかった風景だ。
かってこの小学校にこれほどの人数が集まったことは無かったろう。
震災以降それぞれの中に芽生えた危機感、それと向き合いながら自らの生活圏でなにができるのか。
僕の住むこの国東の地でもやっと人が集まり始めたところだ。
http://www.wtv.co.jp